



# 生者の悩み分け持つ

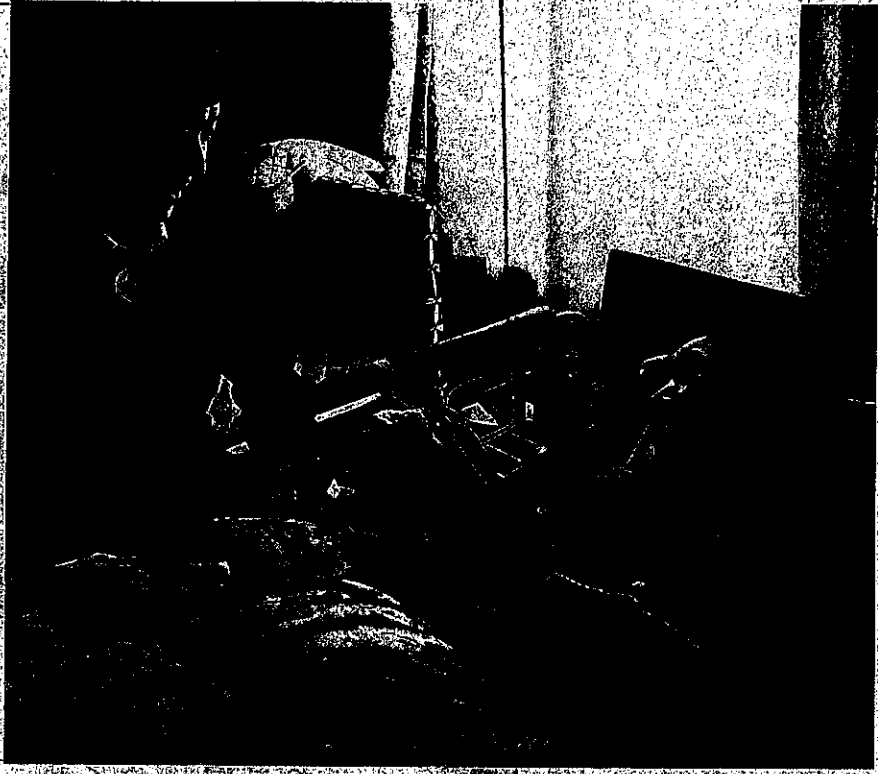
お坊さんが必要なのはお葬式や法事の時だけ。時に「葬式仏教」とやめられる現状を変えようと、僧侶たちの間で新たな試みが始まっている。終末期の患者や災害遺族の心のケアに、宗教・宗派の違いを超えてあたる「臨床宗教師」を養成する取り組みだ。死者を手づかんでなく、生者の日々の苦しみに寄り添おうと、各地で動きだしている。

## 臨床宗教師としての僧侶

2月中旬、伊吹おろしに小雪が舞う岐阜県大垣市内を、在宅緩和ケアの現場で働く臨床宗教師の田中至道さん(26)と龍谷大学学院出身の僧侶、車のハンドルを握っていた。患者宅に向かうのはこの日が2回目。玄関の扉を開け、寝室で横になる神原栄子さんの(70)のそばに座った。

臨床宗教師は、宗教者が超宗派で被災遺族の支援にあたった東日本大震災を機に、2012年から養成が始まった。これまでに約100人が大学の養成講座を修了している。布教や勧誘は一切せず、相手の宗教観を尊重し、求めに応じた質問などに答えるのが臨床宗教師の基本だ。

田中さんは岐阜市の寺に生まれ育ち、京都での学生時代には医療と仏教をテーマに研究した。在学中の実習先だった巡回病院(大垣)で「今日はいかがですか」。顔を



自宅で療養する神原さん(70)を訪問し、ベッドサイドで話を聴く臨床宗教師の田中さん

臨床宗教師 病院、福祉施設、被災地などで人々の悩みや苦しみに寄り添うための専門性を身に付けた宗教者。仏教、キリスト教などの宗教・宗派の違いを超えて活動する。2012年以降、東北、龍谷大、龍谷大が養成講座を開校。対象は主に僧侶(坊主)(住職(配属者))、神父、牧師で、宗教心理学や精神保健学などの講義と実習の後、修了証が授けられる。資格認定は行われていない。

## 終末期患者、災害遺族の心ケア

市)に就職し、僧侶でもある院長に勧められて昨夏、臨床宗教師の研修を東北大で修了した。今はまだ、田中さんのように有給の臨床宗教師がいる施設は全国でも少なく、医療機関では4カ所、老人介護施設は2カ所(谷山洋三・東北大准教授調べ)にすぎない。

患者や遺族にとってなじみがないだけに「宗教者、私はいらない」と拒まれることもある。それでも、少しでも心の重荷を下ろす手伝いできればと、田中さんはこれまで10代の女性ほどになる間際、自分の娘のことか分かるくらいに意識が混濁していたが田中さんが手を握る(2)院(僧侶)が来てくれたと、心底ほろろとしたような表情を浮かべた。そのことが忘れられないという。

神原さんの枕元に座って1時間余り。ちょうど1年前に神原さんが自動車事故を起こして救急搬送された時の話になった。「あの時は、かたも怖ろしいと思った。でも治らんかった。事故で死ななかつたのは、またこの世で生きなあかん宿命があるんや。」「(神仏からの)お与えがあるうちは」。気丈に言葉をつなぐ神原さん。「死ぬのも生きるのもつらいけど、田中さんがさうとうとやき、顔を見合せてほほえんだ。

玄関を出ると雪はやんでいた。帰り道、田中さんは今後の病状を気にかけるが、冷たい空気を大きく吸い込んで言った。「これからはもっとスピリチュアルな心の痛みが出てくる。それを見逃さないように、きちんとしてあげていかないと」。(清原絵也)

6面(1)続く

# 死出に添う 役割広げ



臨床系教師の養成は東日本大震災が契機となり、3年前に始まった。龍谷大学院（京都市伏見区）で昨春、西日本初の研修プログラムがスタートし、このほど第1期生が修了。種智院大（同）でも今秋から養成講座が開かれるなど広がりを見せている。

## 臨床系教師 各地で養成講座



1月29日、龍谷大学院で行われた修了式に1期生11人が臨んだ。病院も被災地で110時間の実習を積んだ僧侶たちが、今後の抱負を発表していく。武蔵野大さん（63）は「被災地には犯罪被害者の支援に取り組みたいと話した。宗教者の役割は今、それほど世間で認められていない。お坊さんやお寺の中でしんどしているのはなく、もう外に出て行かなくては」と力を込めた。

終末期医療の現場では、患者が抱える死への不安などに対処する「スピリチュアルケア」が注目されている。これまでもキリスト教系ホスピスが先駆けとなり聖職者が患者に寄り添う活動や、近年東日本大震災の被災地で行われた臨床系教師研修の実習で、犠牲者を悼む学生たち（2014年5月、宮城県石巻市）龍谷大学院提供

## 宗派超え 存在意義示す

では仏教系ホスピスなどでのヒハツ活動の例があるが、一般病院内の多くは院内での宗教活動を禁じており、患者と宗教者の接点はごく限られている。

こうしたなか、震災遺族のケアにあたり宗教者たちの活動に着目したのが、宮城県の著名な緩和ケア医で、自らもがんを闘った岡部健さん（2012年9月に62歳で死去）だ。2千人以上の患者をみとる中で「闇に降りていく道しるべを示すことのできる専門家が、死の現場にいない」と実感。欧米でチャプレンと呼ばれる病院所属の聖職者をモデルに、教養や宗派に関係なく患者をケアする職業の必要性を訴え、田内初は臨床系教師養成講座の実現に努めた。

同講座を開講した東北大学院では、3年間に僧侶や牧師ら91人が修了証を手にした。これにならって他の大学でも講座が設置され、昨年に学内の僧侶を対象に研修をスタートした龍谷大学院では、今春から外部の宗教者にも門戸を開放する。種智院大も秋から養成講座を開く予定だ。龍谷大（横浜市）も曹洞宗の修行僧向けの講

座を始めている。今後、臨床系教師はその役割を一人一人が追加研修を毎年受けるなど広げられ、活躍の場を増やし、として、人に寄り添うためのスキルを高めていくことが大切だ」との主任を務める鍋島直樹教授は「まずはボランティアとして受け入れ、宗教の復権をかけた動きが始まっている」（信原裕也）

全国に約50か所とされる臨床系教師を雇用する医療機関のなかで、在宅緩和ケアに力を入れる沼田病院（岐阜県大垣市）の院長沼口諭さん（53）は「龍谷大の僧侶、聖職者に聞いた。日本では8割の人が病院で亡くなる。3人に1人の死因はがんだ。多くの人は何らかの苦悩を抱えて亡くなる。今の医療現場を見たとき、輸入品である欧米型の緩和ケアだけで、日本人が求めるスピリチュアルケアに対応できるのかという疑問がわく」と話した。

実際、終末期の在宅医療では、ハイテク機器を持ちこんで治療するというよりも、いかに心や体を支えながら生きていくかが大切になる。例をば、最期に「神仏や親などが枕元に立つ」とお迎え現象を経験した患者は穏やかに亡くなった。その空間でスピリチュアルケアを行うときに、やはり日本人の宗教観や死生観は大事になる。

一般に、医療者は死後のことについて語れない。だが宗教者は引かずに向き合える。もともと日本にもチャプレンのような存在を求め、そのニーズに対応できる宗教的、文化的資源があるにもかかわらず、宗教者自身が気がつかないまま葬式仏教を生懸命やってきた。医療と宗教のマッチングの先鞭を付けるのが臨床系教師だ。僧侶には「法衣を着て病院に行かない」という意識があるが、「門徒さんの家なら見舞うことができる。最期に「良かったね」と手を握ってあげれば、QOL（クオリティ・オブ・ライフ）の質）はきつと高まる。必ずしも臨床系教師にならなくても、その理念の下に動く宗教者が増えればよい。

## 臨終の質 高める理念を

僧侶で医師 沼口諭さんに聞く



沼口諭さん（53）は、龍谷大学で臨床系教師養成講座を開講した。僧侶としてだけでなく、医師としての経験も豊富だ。臨終の質を高める理念を語る。